

## 日本現代文学と翻訳の視野

坂井セシル

異文化交差の中心的な分野として、翻訳研究、あるいはトランスレーション・スタディーズ (TS) が最近世界的に新たな発展に直面しており、あらゆる大学や研究機関でゼミ、シンポジウム、講座、講演会などが活発に開催されている。2010年の1月には立命館大学で、「日本におけるトランスレーション・スタディーズの行方」と題する国際シンポジウムが行われ、マンチェスター大学の翻訳論の第一人者、テオ・ヘルマンズが見守る中、活発な発表、質疑応答などが繰り返され、その成果集は昨年日本で刊行された<sup>1</sup>。

そこで再認識されたのは、翻訳という操作、概念、および実践が日本文化と深い関わりを持っていながらも、まだその批評的扱いが不十分であるということであった。それは、日本翻訳史において、中国からの表記輸入時代以来の翻訳大国としての過程などが、柳父章などによって研究されてはいても、理論的な探求、例えば言語哲学や異文化交差学、社会文化学、文化経済学、などを使った研究があまりにもまだ少ないことを指している。それも、ほとんどの場合、翻訳を行う側、つまり外的影響を受け入れる側としての分析が多く、翻訳される側、つまり文化輸出のほうの研究はまだ初歩的なところにある、と考えられる。あえて、一時流行った日本文学の外国語訳における誤訳探しは考察から除きたい。もっとも、文化輸出という過程がはっきりしてきたのも、最近の現象なので、まだ開拓期の研究分野である、と言えよう。その中でも早稲田大学の岩淵功一の諸研究<sup>2</sup>は先端的で、20世紀から21世紀にかけてのグローバルな世界の中の日本のポップカルチャー、あるいは複雑なコンセプトであるアジア文化の世界への進出を考察の対象としている。

さて、日本文学も現在グローバルな背景の中で創作され、発展し続けている。それは、つまり、言語芸術として必ず翻訳問題と出会うことになるわけだ。近代文学の誕生以来、ほぼ150年の流れを経験してきた今日の新しい観点にたつて、日本現代文学が現在直面している様々な形での翻訳の視野というものをいくつかの代表的な例を選んで、ここで考えてみたい。

1

佐藤＝ロスベアグ・ナナ編、『トランスレーション・スタディーズ』、みすず書房、2011年参照。第二章、「世界文学としての日本文学」に編集されている、日地谷＝キルシュネライト・イルメラ、「世界文学に応ずる日本文学—プリトランスレーションなどの戦術について」、及び、拙論「川端康成と村上春樹の翻訳に見られる文化的アイデンティティの構築」は、今回のワークショップと少なからず関連付けられる。

2

岩淵功一、『トランスナショナル・ジャパン—アジアをつなぐポピュラー文化』、岩波書店、2001年、*Recentering Globalization: Popular Culture and Japanese Transnationalism*, Duke University Press, 2002、『越える文化、交錯する境界——トランス・アジアを翔るメディア文化』、山川出版社、2004年、『文化の対話力——ソフト・パワーとブランド・ナショナリズムを越えて』、日本経済新聞社、2007年他参照。

## 文化輸入国から輸出国へ、日本文化のフランスにおける受容

翻訳は出版市場において一応のウェイトを占めていて、出版年鑑や経済白書を調査すれば、いろいろとデータが出てくる。他方、翻訳は技術翻訳と文芸翻訳と大きく二種類に別れ、技術翻訳のシェアのほうが断然強力な経済マーケットとして存在している。

ただし、影響力や文化的インパクトからいうと、文芸翻訳も重要である理由の一つは、受け入れ側の浸透<sup>3</sup>を求める技術翻訳と比べて、文芸翻訳の場合、独創性、あるいは特殊性、つまり文化アイデンティティの表象との関わりが直接機能するところにある。異文化交差のなかでは、もっとも象徴的な役割をたす分野であるのではないかと思われる。

ケーススタディーとして、フランスにおける日本文学の受容形態を検討したい。2007年のフランス翻訳市場で一種の事件として報道されたのが、史上はじめて、英米圏の書籍仏訳の次の第二のポジションに日本語からの翻訳が躍り出たことである。出版界の専門雑誌 *Livres Hebdo* (n. 724, March 2008) の特集が示すように、それまで英米圏の圧倒的支配の次に、スペイン語やドイツ語のヨーロッパ言語の翻訳が主流であったところに、2007年の総合8549点(総合出版物の14.2%)の翻訳のうち、英米5137点の次に、日本語の(桁違いではあるが)642点が登場し、その次にドイツ語の606点、イタリア語の406点、スペイン語の276点、他という結果になっている。

これは推測されるとおり、マンガの翻訳の増加からくる数字である。ジャンル別に比較すると、事実はよりはっきりする。文芸翻訳のみのデータの方は、同じ2007年において、日本からの翻訳数を42点に落とし、第8位のランクに後退させる。文学作品に関しては、英米圏が2565点、桁がまた変わって、次がスペインの146点、ドイツの116点、イタリアの108点、北欧圏の90点、ロシアの50点、東ヨーロッパ圏<sup>4</sup>の44点となっている。この日本の第8位というのは、絶対数としては少ないが、相対的なシェアから見ると決して無意味なものではない。ちなみに中国は22点、韓国は9点となっているが、前年、2006年の中国は37点となっていた。ここで指摘したいのは、正確な分析の基盤になる統計は長期的に、一定の期間をベースに計算する必要がいずれ出て来る、という事である。また、いうまでもなく、背景としての文化、社会、歴史、政治や経済の流れをも考慮に入れて、初めて総合的な解釈が可能になる。他方、翻訳史の流れで考えた場合、1985年代以来、日本文学のフランス語への翻訳作業が積極的に続いてきた確実な蓄積の結果であると言える<sup>5</sup>。

さて、この2007年には具体的にどのような作家や作品が翻訳されていたのか。フランス日本研究学会 (*Société Française des Etudes Japonaises*, URL [sfej.asso.fr](http://sfej.asso.fr)) が2007年に発表している目録は以下の通りである。

3

アンソニー・ピムは受容の場への応用を問題にしており、翻訳のローカライゼーション、あるいはドメスチケーションといった側面を徹底的に研究している。アンソニー・ピム、武田珂代子訳、『翻訳理論の探求』、みすず書房、2010年、Anthony Pym, *Exploring Translation Theories*, Oxon and New York, Routledge, 2010 参照のこと。

4

より正確な統計を提出するためには、英米圏、北歐圏、東ヨーロッパ圏といった、おおざっぱな枠組みは解体され、一國一言語の単位で考えるべきであろう。

5

この点については拙論、「フランスにおける日本文学」、研究ノート、『日本近代文学』第66集、2002年5月、あるいは“*The Reception of Japanese Literature in France: Major Trends and Perspectives*”, in *Japan as Represented in the European Media: Its Analytical Methodologies and Theories – in Comparison with Korean Cases*, Kyoko Koma (ed.), Vytautas Magnus University, Kaunas, May 2011 を参照のこと。

1. *Jeunesse : anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, tome 1, trad. Pascale Simon et Jean-Jacques Tschudin, Monaco, éd. Du Rocher, 2007, 288p.
2. *Le Désir : anthologie de nouvelles japonaises contemporaines*, tome II, trad. Pascale Simon et Jean-Jacques Tschudin, Monaco, éd. Du Rocher, 2007, 256p.
3. Hayashi Fumiko, *Les yeux bruns (Chairo no me)*, trad. Corinne Atlan, Monaco, éd. du Rocher, 2007, 296p.
4. Higashiyama Kaii, *Les quatre saisons de Kyôto*, trad. René de Ceccatty et Nakamura Ryôji, Paris, Seuil, 2007, 223p.
5. Hirano Keiichirô, *La dernière métamorphose (Saigo no henshin)*, trad. Corinne Atlan, Arles, Picquier, 2007, 168p.
6. Kawakami Hiromi, *La Brocante Nakano (Furudôgu Nakano shôten)*, trad. Elisabeth Suetsugu, Arles, Picquier, 2007, 286p.
7. Kirino Natsuo, *Monstrueux (Gurotesuku)*, trad. de l'anglais par Vincent Delezoide, Paris, Seuil, coll. Thrillers, 2007, 620p.
8. Miura Ayako, *Au col du Mont Shiokari (Shiokari tôte)*, trad. Marie-Renée Noir, Arles, Picquier, 2007, 320p.
9. Murakami Haruki, *Passage de la nuit (After Dark)*, trad. Hélène Morita, Paris, Belfond, 2007, 230p.
10. Nagai Kafû, *Scènes d'été (Natsu sugata)*, nouvelles trad. Jean-Jacques Tschudin, Monaco, éd. Du Rocher, 2007, 112p.
11. Numa Shôzô, *Yapou, bétail humain (Kachikujin Yapu)*, volumes I à III, trad. Sylvain Cardonnel, Paris, Désordres Laurence Viallet/éd. du Rocher, 2006-2007.
12. Oba Minako, *Larmes de princesse (Ôjo no namida)*, trad. Corinne Atlan, Paris, Seuil, 2006, 270p.
13. Ogawa Yôko, *La Bénédiction inattendue (Gûzen no shukufuku)*, recueil de nouvelles trad. Rose-Marie Makino-Fayolle, Arles, Actes Sud, 2007, 192p.
14. Ogawa Yôko, *Les paupières (Mabuta)*, recueil de nouvelles trad. Rose-Marie Makino-Fayolle, Arles, Actes Sud, 2007, 208p.
15. Ono Fuyumi, *Les douze Royaumes, le rivage du labyrinthe*, livre 2, vol. 1, trad. Emmanuel Pettini, Paris, Milan, 2007.
16. Ooka Shôhei, *Journal d'un prisonnier de guerre (Furyoki)*, préface de Claude Mouchard, trad. François Compoin, Paris, Belin, coll. Littérature et politique, 2007, 508p.

17. Osaragi Jirô, *Les guerriers d'Akô* (Akô rôshi), trad. Jacques Laloz, Arles, Picquier, 2007, 789p.
18. Tsuji Hitonari, *La promesse du lendemain* (Akashia), trad. Yutaka Makino, Paris, Phébus, 2007, 176p.
19. Umezaki Haruo, *Illusions* (Genka), trad. Jacques Laloz, Monaco, éd. du Rocher, 2007, 158p.
20. Yamada Fûtarô, *Shinobi* (Kôga ninpô-chô), trad. Sylvain Chupin, Paris, Calmann-Lévy, 2007, 252p.
21. Yoshida Shûichi, *Park Life*, trad. Gérard Siary, Arles, Picquier, 2007, 98p.

一応ここで、21点（沼正三の三巻記を含めて23点）の作品が揃うわけであるが、上記の2007年の文芸翻訳点数の統計が42点になっているのは、他にも再販、童話、エッセーなどが広く含まれているからであろう。

この目録で一番気になるのは、発表されているもののいわば不均質性、異質性である。実際は三つの異なる枠組みが共存しているからである。第一に純粋な商業ベース（ベストセラー規範型、出版社始動）で刊行される作品がある。それは、例えば村上春樹、小川洋子の小説の場合である。第二に、学術ベース（近代の作品を含めた名作導入型、大学関係者、翻訳者始動）で発表されるものである。上記リストの例として、平野啓一郎、永井荷風、あるいは大庭みな子を挙げることができる。そして、第三に、日本発信の推薦ベース（日本の機関で選ばれた作品の翻訳助成金支援型、最近ではJLPP、周知の現代日本文学翻訳普及プロジェクト始動）で刊行される作品がある。例えば、1、2の「青春」あるいは「欲望」といった短編集はそうであり、三浦綾子や大佛次郎の作品もそうである。勿論、同じ読者が全部読む訳でもないし、それなりに輪が広がっていることにもなるが、かなり混沌とした、翻訳を経由した複雑な文学模様が描かれていると言わざるをえない。それだけ成熟した市場という解釈も可能であるが、反対に成り行きにまかせて翻訳は起動中といった雰囲気も感じられる。

### 村上春樹 / Haruki Murakami

その中で、はっきりと輪郭がみえるのが、他でもなく、フランスでも村上春樹である。この2007年の『アフターダーク』はあまり評判にはならなかったのだが、その前年、2006年1月にベルフォン社から刊行された『海辺のカフカ』(Kafka sur le rivage, Belfond)は数ヶ月で7万部売れるという、記録的な成功をおさめた直後ということになる。2011年現在16点の作品（『1Q84』の3巻目は翻訳中）が仏訳されている村上春樹は、それまでニューウェーブの

騎手としての知名度は高かったものの、このようなベストセラー入りを達成するとは誰も思っていなかった。フランスでの成功の理由として、偉大なるヨーロッパ作家カフカへのオマージュを挿入した 題名の微妙な組み合わせ、また、小説の神秘的な探求性、シニカルな側面などが、興味を引いたのだと考えられる。とにかく、フランスにおけるれっきとした外国文学の一つとして日本文学が確立された事を意味する事件である。換言するならば、これが日本文学の外国におけるメインストリームで、以前のノーベル賞作家、川端康成（1968年受賞）、あるいは大江健三郎（1994年受賞）の人気を現在をはるかに超えていることが明らかになっている。

このハルキムラカミ現象は、数々の分析が日本でも外国でも発表されているので、あえてコメントは省くが、世界的な評価のキーワードが英米翻訳にあるところに注目したい。つまり、ハルキムラカミの外国での受容は、日本文学の模範としてではなく、新しい形態のアメリカ文学の影響下の日本文学として位置付けられている。より正確に形容するならば、ハイブリッドな、混合体としての作風が一種の新しい、21世紀の普遍性の表象として興味深く読まれ、評価されているのである。そのアプローチを裏付けるような行動をムラカミは幾度も起こしている。面白い例として、短編の『レーダーホーゼン』（1985年発表）<sup>6</sup>を例に挙げたい。1992年にイギリスの文芸誌『グラント』に Alfred Birnbaum により翻訳されてから、村上自身によるその英訳からの和訳ヴァージョン『レーダーホーゼン』が2005年刊行の『象の消滅』という短編集に収められている。そして、その『象の消滅』がまた、いくつもの他の外国語に翻訳されてゆく、といった、重層的な効果を生み出している。この作品は原本が英訳版を経由して二重に存在するといった、ある意味では文学史上革命的な循環を実践しているのであり、また翻訳の翻訳が原本に変貌するといった、従来の芸術の思想を揺るがすような実験を披露している。作家と翻訳家の融合体として、ムラカミは確実に未来を開拓し続けている。

6

以下の状況説明は、村上春樹、『ハイブ・リット』、アルク社、2008年に掲載されている。柴田元幸、「作品紹介」、151ページ参照。

### メインストリームから遠く離れて

このような日米をリンクさせる王道的な戦略が成功しているからこそ、あるいはそれとは関係なく、ただ独自の方法を使って、「日本」文学からの脱出、あるいは異化を探求している最近の作家の仕事が関心を誘う。いずれも翻訳問題を経由して展開される文学的作業であるのが共通点である。ここでは一応代表的なパターンとして、水村美苗の反抗、多和田葉子の揺さぶり、リービ英雄のポリフォニー／トライフォニーを考えてみたい。

## 水村美苗の反抗

最近刊行された『日本語が減びるとき』（筑摩書房）他3巻のエッセー集が話題になった水村美苗であるが、ここでは初期作品の『私小説 From left to right』（1995年）の意味付けに注意したいと思う。市場初めてで最後のバイリンガル小説と呼ばれたこの小説は単なる言葉遊び、あるいは文化ゲームの産物ではない。水村がインタビューなど<sup>7</sup>で説明しているように、この小説には絶対に英語に翻訳され得ない「反転不可能」な小説としての特別な価値がある。完璧な英語を駆使しながらも、英訳を拒否するという、まことに逆説的な文学装置がここでは機能している。つまり、作品の肝心な言語的差異が英訳された場合完全に消滅してしまう、という装置で、それを水村は英米文化支配に対する抵抗の創作であると強調している。水村のいう「非対称性」を問題にする思想は政治的な意味を持つわけだが、その結果、日本語、日本文学の守衛に回るといふ、ナショナリスチックなスタンスが少なからず見受けられる。まして、翻訳をとおして流布される作品の国際性に対し、自己検閲を行わざるをえないという、屈折した環境に飲み込まれてしまいそうな危険な道を作家水村は歩んでいる、といえよう。

7

例えば、「世界における日本語小説の可能性」、水村美苗インタビュー（聞き手、芳川泰久）、『海燕』、1995年2月号を参照のこと。

## 多和田葉子の揺さぶり

多和田葉子の立場は初期作品の時からはっきりしている。1993年に刊行された『アルファベットの傷口』（後に『文字移植』と改名）が明確に表しているように、翻訳は不可能であるということが原点であり、翻訳コミュニケーション論とは遠く離れた、新しい次元の文学世界を繰り広げている。日本語とドイツ語、言語と言語が揺さぶり合い、そこから初めて新たな表現の場が広がるという仕事が繰り返されている。完全に脱構築型でありながら、同時に建設的であるという、やはり逆説的な作業が基盤にある。ここでも、差異という操作が中心的な役割を果たすのだが、その差異はそのまま、翻訳され得ない、吸収されない、「かす」のようなものとして具体的に存在し、強く記憶に残る。表記文字、特に漢字などが、意味伝達に使われるよりも、異物、あるいはモノとして存在するのもそのためである。この現代作家のユニークな非翻訳戦略は、しかし、生命に関わる緊迫した要素をも含んでいる。

8

『新刊展望』、1993年11月号、後、『カタコトのうわごと』、青土社、1999年、に収録。

「翻訳という熱帯旅行」<sup>8</sup>の最後に多和田はこう書いている。

「翻訳の過程で、ばらばらになった言葉が、これまでに持っていなかった力を得て、反乱を起こし、もう文章という行列は作らないぞと暴れ回る現場を覗き込んだことのある人の目には、いわゆる上手な翻訳などというものは、

大根畑のように退屈だ。／だから翻訳家は旅に出る。どんな旅も翻訳と似たようなものであり、今度は言葉ではなく自分がばらばらになっていくのだということも知らずに。」(『カタコトのうわごと』、青土社、1999年、23ページ)。

意味が碎かれる環境は危険性を伴い、例えば最近出版された『ボルドーの義兄』の日本語版<sup>9</sup>とフランス語版(ドイツ語からの翻訳)を比較してみると、読者が理解できないモノとしての言葉、漢字が構造的に利用されている。主人公の滞在記の各項目の題目として、アルファベット文字の文章の場合は読み方も意味も伴わない、そのままの漢字が登場し、日本語版は裏返しの漢字が印刷されている。最も、裏返しの漢字という文字は読めないわけではない。読解に努力が必要なだけである。アルファベット文字に混ざった漢字のほうは、日本語に無知な読者にとっては、全く意味不明である。この、同等とは言えない扱い方は、しかし究極的には、異質なテキストを産み、受容しきれない文学を演出している。それは、危険を承知で翻訳の拒否を具象化した作品で、だからこそ、翻訳の新しい視野を開拓しているのだといえるだろう。

### リービ英雄のトライフォニー

前述の水村、多和田の日本語母語作家とは異なり、リービ英雄は1950年、カリフォルニア州生まれのアメリカ人である。その後、外交官の父が勤務する台湾や香港で過ごし、日本には16歳のときから住むようになるが大学はアメリカに戻る。数年後、プリンストン大学博士になったリービは米日本学の権威として、プリンストン、そしてスタンフォードの日本学教授として活躍し、とくに『万葉集』の全訳を1982年に完成させ、全米図書賞を受ける。しかし、日本語小説を書く夢を捨てきれず、90年代に東京に永住を決め、1992年には『星条旗の聞こえない部屋』でデビュー、そのまま野間文芸賞をもらい作家生活に入るといった、何もかもが非凡な人生を歩んできた。現在は法政大学教授を兼任しながら意欲的な作家活動を続けている。

リービが具現する国際性とは、ボーダーレスの多国籍の浮遊するアイデンティティと形容するのが適切かと思われる。すなわち、アメリカ、日本、中国を結ぶ有徳の輪の結晶がリービ自身であり、日本語で書かれた作品の中心人物もやはり多言語話者のリービ自身である、という装置になっている。その根底には透明で効果的な翻訳思想があり、「あたりまえ」の事実としてのコスモポリタニズムを築いていく。

2004年発表の『千々にくだけて』<sup>10</sup>の序の部分で、翻訳という機能が衝撃的な2001年9月11日のテロ事件と交差する場面があるので、一部引用する。

9

講談社、2009年刊行。ドイツ語版、*Schwager in Bordeaux*. Konkursbuchverlag Claudia Gehrke, Tübingen. は2008年刊行で、ドイツ語からのフランス語訳は2009年に *Voyage à Bordeaux*. traduction Bernard Banoun. Verdier, Lagrasse、として出版されている。

10

『群像』、2004年9月号、後講談社より2005年刊行。

「エア・カナダ機がスピードを落とした。滑走路の上を動いた。そして、最後の一息が切れて残りの数十メートルをあきらめたかのように、とつぜん、だがとても自然に、途中で止まった。／窓の外でゆっくりと流れていた敷地と、その向こうに連なる森林も、その動きが止まり、白い大空の下でじっとたたずんでいた。／まわりから、英語と日本語と、すこしだけの北京語の静かな声が耳に入った。それらの小さなざわめきの上で、スピーカーからは、五十代の男の声が聞こえた。／Sometimes / 機長の声だった。機長の声は、米語のようだが、米国人の米語よりやわらかに聞こえた。／機内に流れる機長のアナウンスの中で、Sometimes ということばをエドワードはこれまで聞いたことはなかった。／ときには、とエドワードは思わず日本語でささやいた。／Sometimes a captain… / ときには、機長というものは…… / 機長の声は、ためらっているようで、わずかに途切れた。それから、ゆっくりと must と言って、つづいた。／……悪いニュースを伝えなければなりません。」(14-15ページ)

この抜粋で明らかのように、環境自体がマルチリンガルな中で、言語間の網渡り役は、やはり、忠実な、正確な翻訳が果たすのである。換言するならば、一見風変わりな多言語空間を引き締めるのは頑丈な、従来のコミュニケーションのツールとしての翻訳思想で、調和と共鳴が基礎を成している。だからこそ、この短編が主題としている悲惨な事件と主人公の孤独は、一定の言語的距離を持って客観的に描かれているのだ。

### 結論にかえて、日本語文学の意味

上記の中堅の作家たち以外にも、新世代の何人かの作家たちがこの翻訳によって開かれた文学場で活躍し始めている。歴史的には、戦前の日本の政治、経済支配の犠牲者たちの日本語文学(中国、台湾、韓国等)の作品があるが、21世紀の傾向としては、自発的に母国を離れ、母国語から離れて、日本語で書き始める作家が登場している。それは、少なくとも建前としては、強いられただけではなく、自由選択によるチャレンジであり、日本版世界文学、いわゆるワールド・リテラチュアの台頭であるかもしれないという意見もある。すでに2001年に沼野充義が「W文学」<sup>1)</sup>と命名していた傾向が10年後本格化した、と言えるのかも知れない。

しかし、質疑も残る。文学的価値というものがあるていど純粋な判断に基いて存在するものと仮定して、日本語文学は、はたしてどう評価されるべきなのだろうか。批評の基準をさらに再考する必要があるのではなからうか。周知のとおり、世界基準の中では日本語はマイナーなローカル言語であり、日本の

11

沼野充義、『W文学の世紀へ—境界を越える日本語文学』、五柳書院、2001年参照。



近代文化も西洋に支配され、現在は英米圏にリードされている、というのが通説である。そのような背景の中、外国出身の作家が日本語で書くということ自体に剰余価値が確認されるというような現象があっても、けっして不思議ではない。なぜならば、日本語や日本文化をメジャー言語、支配文化へと変貌させていく過程に参加しているからである。それは、いうまでもなく、文化的グローバルイゼーションに対する、正当化争いの一コマである。ここで、それらの日本語作品を例えばフランス語翻訳という試練にかけたとして、作品の所在があやふやであるだけでなく、内容価値の判断も困難になってくるのではないかという危惧を感じる。改めて認識したいのは、状況の評価と内容の評価はまったく異なるレベルで展開する、ということである。最も、何もかも、時間の問題で、いずれ大家、大作も現れるかもしれない。ナボコフ、ベケット、コンラッド、クンデラ、あるいはラシュデイやイシグロなど、評価が直ちに定まったわけではないのだから。

また、歴史的にみた場合、現在の現象は第二次世界大戦以前の明治後期、大正前後のはなやかな日本のコスモポリタニズムを喚起させる。当時の文化も、閉ざされた空間ではなく、漱石、鷗外、荷風、あるいは岡倉天心や久生十蘭は、時代も背景も全く異なるものの、母国からの脱出を試み、国語問題と直面し、真っ向から文学という「方法」を使って芸術の表現という「テーマ」を追求したのである。現在の状況にそのまま類似をみる訳では勿論ない。ただ、ここで指摘したいのは、現在のネット革命下のグローバル文化の時代の土台には、歴史的な実験、試練、巡り会い、想像、夢などが数限りなく蓄積されていて、一種の文化的予示を構成しているということである。現代の文学と翻訳の関係を総合的に把握するためには、遡及的な観点も必要なのではなかろうか。